

一席 沖縄県知事賞

「幸子」と呼びたい！

山下 泉

戦後七十年、いや、わたしにとっては七十一年になる今も、大切にしている一枚の写真がある。セピア色に変色し、消えかかっているところもあるが、紛れもなくわたしの家族の写真なのだ。

父を挟んで、長女のわたしと、長男勇一、次男康夫が「気を付け！」の姿勢で立っている。その前列に、よそゆき顔の次女智江と、生まれて間もない幸子を抱いた母が、腰掛けている。

右下隅かすかに「サイパン写真館」と読みとれる。幸子の誕生を記念した写真だから、昭和十八年、サイパンに米軍が上陸する一年前だ。

わたしはもう、傘寿の坂を越えた。この唯一ともいえる写真の幸子を見ていると、なぜか心掛かりることがあつてならない。

それは、二十数年前にも、十数年前にもあつたこと。そして昨日も

……

一

戦前の沖縄は、今では考えられないほど貧しかったようだ。

貧乏から抜け出したい、あわよくば一旗あげたい、ということ、日本本土や、遠く南米、ハワイ、そして南洋群島へと、新天地への夢を抱

いて、沖繩を離れる人は、後を絶たなかったという。

わたしの両親も、そんな人々の一人として、沖繩の遙か南二千キロ、太平洋上の小さな島に渡ったのだった。

父は二十一歳のとき、叔父の呼び寄せでサイパンにやって来た。叔父は、南洋興発という、半官半民の砂糖生産会社の土地を借り受け、サトウキビ栽培をしていた。父は、その叔父の農場で働いていた。

母は十六の春を迎えると、本土の紡績工場に行こうと考えていた。そんな矢先、たまたま一時帰郷していた叔母に説得され、サイパンに連れてこられた。

サイパンの首都ともいべきガラパンに住む叔母は、トラック運転手の夫と、尋常小学校に通う娘との三人暮らしで、生活は割と楽のようだった。母は、叔母の家に寄宿しながら、南洋興発の製糖工場に近いチャラ

ンカノアの共同売店に勤めた。

その売店にたまたま買い物に来ていた父とは、「字」^{あざ}は違うが、同じ美里村出身ということもあり、直に気軽に話し合える仲になった。二人は、同郷出身者の集いにもたびたび顔を出すようになり、ごく自然の成り行きのように結ばれた。

結婚してまもなく、わたしが生まれると、母は売店をやめた。父は独立して、南洋興発の土地を借り、自分でサトウキビ栽培をするようになっていた。

農場は、島で一番高いターポッチョ山の麓にあつた。なだらかな傾斜に、広い展望を持ち、西の海岸線を、ほぼ一望に収めることができた。

サトウキビを運ぶ軽便鉄道の機関車が、黒い煙を吐きながら、ガラパンの街を力強く通り過ぎていく。その向こうには、茫洋たる海が広がり、

テニアン島を浮かび残して夕陽が沈んでいく。

わたしが生まれて二年後に、勇一が、続けて康夫が誕生した。さらに二年置いて智江が生まれ、家族は六人となった。

家は、サイパンの農場によく見られる高床式のトタン屋根で、雨水を貯めるコンクリートの大きな水タンクがついていた。子ども心にもそれは立派な家に思えた。

庭の、ピンクや黄色のプルメリアの花は、とても香りがよく、いつも大きな蝶が群れていた。「南洋桜」と親しまれたフレームツリー（火炎樹）が、真っ蒼な空に燃え立つような紅を競って揺れていた。

バナナやパイアがたわわに実り、放し飼い同然の鶏たちが、庭木の間を見え隠れしている。

そんな鶏たちが産んだ玉子を拾うのは、わたしたち子どももの仕事だ。

時々拾い忘れた卵がヒナに孵って、親鳥と一緒にやって来る。その様子は、わたしたち家族を見ているようで、思わず微笑んでしまった。

家の周囲は、野菜やタピオカ畑で、それ以外は見渡す限りサトウキビの緑のうねりだった。

この島では日の出とともに起き、日が沈むと一日の営みを終える。太陽が、空と海を茜色に染め水平線に隠れると、石油ランプのもと家族そろって夕食をすませ、賑やかな団欒のひと時となる。

団欒の後は、何の娯楽もない時代のこと、早めの就寝となるのであった。「ヨイ、ドン！」

父の号令を合図に、だれが一番早く寢床にもぐり込むかを競いあう。それはそれは楽しいゲームみたいなものだった。

サトウキビの収穫が一段落すると、家族全員カレータ（牛車）に乗り

込み、ガラパンの街へ出向いて行く。

ガラパンでは、叔母（わたしからすれば大叔母）の家に立ち寄り、昼ご飯をごちそうになるのがお決まりのようになっていた。わたしたちは、そこを母の実家のように思っていたのだ。

ガラパンには、役所や警察署、そして商店から金物屋、飲み屋もある。サイパンの日本人の多くを、沖縄出身者が占めているので、沖縄芝居の劇場や沖縄そば屋、泡盛の酒造所まで設けられていた。料亭もあり、沖縄の人が経営しているという話だった。

日照りが続くと、家族揃って海に向かう。山のようにたまった洗濯物をカレータに満載し、わたしと勇一と康夫は、その上で揺られ、何か珍しいものはないかと、道々眼を遊ばせていた。

母は、智江を抱いて、大きく脹らんだ乳房を含ませている。父は、沖

縄の民謡などを口ずさみながら、慣れた手つきでカレータを巧みに操っていた。

潮の匂いが近くなると、アダンの林にたくさんいたヤシガニを捕まえるのも、楽しみの一つであった。勇一、康夫と三人で、大きな木綿袋がいっぱいになるほど獲れた。

母が智江を寝かしつけ、洗濯している間、父は素潜りで魚を突く。子どもたちは浅瀬で、珊瑚に群れ遊ぶ色鮮やかな熱帯魚を追う。

大きなモクマオウの木陰で、フウフウ息を吹きかけながら頬張った、捕れたての焼き魚の香ばしくおいしかったこと……

洋上には、緑豊かなテニアン島が、手繰れば引き寄せられるのではと思いうくらい近くに浮かんでいた。

昭和十五年、わたしは尋常小学校に入学した。サイパンには、移民の子弟のための小学校は七か所を数えた。ガラパンには実業学校と高等女学校もあり、高等女学校では、内地と同様の普通教育を受けることができた。

翌、十六年、尋常小学校が国民学校と改められる。校門を入ると、正面に「奉安殿」があり、登下校のときは、天皇后両陛下の「御真影」に直立不動で最敬礼することになっていた。

運動会の遊戯の種目にも、変化があった。

「兵隊さんよありがとう」の歌に合わせ、男女が向かい合って踊る。男子が兵隊さん、女子は従軍看護婦という設定だ。

肩をならべて兄さんと

今日も学校に行けるのは

兵隊さんのおかげです

お国のために

お国のために戦った

兵隊さんのおかげです

軽快なメロディーに、声を大にして誇らかに歌いながら、力いっぱい踊る。

団体競技は、「敵」に見立てた藁人形を、木製の鉄砲で突いて戻ってくるリレーを競い合った。

師走の朝礼で、

「十二月八日の真珠湾攻撃で、大勝利を収め た我が日本軍は、いまや破竹の勢いで勝ち 進んでいる！」

と、校長先生が顔を真っ赤にして話すお姿は、わたしたち小さい胸をどんなに高鳴らせたことか。戦勝に沸き立つ内地の祝勝気分が、こんな小さな南の島まで伝わってきたのだった。

昭和十八年、国民学校四年生のとき、末っ子の幸子が生まれた。わたしたちの七番目の家族だ。

幸子という名は、両親が「幸多い人生を」との思いを込めて付けた。ドンダリ眼まなこの丸々と太った赤ん坊だった。年の離れた末っ子ということもあつたが、どこか人にかわいがられるところを持っていた。

「ねえ、お父さん、幸子は、初子が生まれた時によく似てない。この目元や、口の小さいところなんかそっくりよ」

「そうだね。ぼくもそう思っていたところだよ。初子が生まれた時を思い出すね」

と、両親が懐かしそうに話しているのを聞き、幸子が一層愛おしくなった。幸子を出産したあと、母は体力が回復せず二か月余りもそのまま病院に入院していた。折からサトウキビの収穫期時だったので、わたしは幼い弟や妹の世話をするため、一月ほど学校を休んだこともあった。

十九年の正月が明けると、クラスの友達で、内地に転校するものが目立つようになってきた。役人や南洋興発に勤める人の子どもが主だったが。

「おとうさん、同じ組の佐藤さんと山口さんも、内地の学校に転校するつてよ。もうすぐ戦争が始まるから、サイパンは危ないつて。うちもソカイしないでもいいの?」

「大丈夫だよ。サイパンはたくさんの兵隊さんが守ってくれているから」
そういつて父はわたしたちを安心させたが、本心は、相次ぐ敵潜水艦による疎開船撃沈の情報を、密かに聞いていたからかもしれない。

学校でも兵隊さんの姿をよく見かけるようになったと思ったら、まもなく校舎が兵舎に変わっていく。わたしたちは、学校近くの想思樹の下で勉強するようになった。

二月二十四日には、米飛行機による初めての空襲があった。飛行場や軍事施設を標的にしたもので、家は無事だったが、父はさっそく庭のホウオウボクの下に、小さな防空壕を掘り始めた。

その一方で、

「サイパンが地上戦になったらみんな守らんといけない。兵隊だけでは数が足りないから」

と違って、飛行場の整備や高射砲陣地構築のため、度々家を後にするようになった。

三

六月のその日は、日曜日だった。太陽がギラギラと照りつけ、空は抜けるように蒼かった。綿をちぎったような白い雲が、ターポッチョ山の頂あたりをゆつくりと流れていた。

家族揃って昼食を取ろうとしているとき、遠くの方で「ズドーン」という爆発音がした。音は繰り返して聞こえてきた。父が慌てて外に飛び出す。子どもたちもあとを追うように庭に出てみると、父の指さす先に、いくつもの黒煙が巻き上がっていた。

「アスリート飛行場がやられてる！」

目を剥いて、父が叫んだ。

黒っぽい色の飛行機が、繰り返し繰り返し爆弾を落としていく。

わたしたち家族は、ホウオウボクの下の方空壕に避難した。狭い豪の中は、ムンムンしている。爆弾が破裂する音は、豪の中まで間断なく聞こえてくる。

突然、「キーン」と耳を切り裂くような音が上空を抜けて行った。その音は、それまで馴染んだわが国の飛行機とは違っていった。勇一が思わず豪から身を乗り出そうとすると、

「顔を出すんじゃない！」

と、父に強く叱責された。いつもと父の目の色が違っていた。

やっと静寂が訪れた。

防空壕から出てみると、西の海が、数え切れないほどのアメリカ軍艦で黒く埋め尽くされている。それを茫然と見詰めている父の後ろ姿が、なぜか小さく見えた。

翌日から、海と空からの砲撃が激しくなった。ガラパンやチャランカノアなど西海岸の街が盛んに攻撃されている。

朝食のあと、父は子どもたちを前にしていった。

「敵が数日中には上陸するという話だ。お父さんは、軍の命令で飛行場の修復に行かなければならない。二日たっても帰らなかつたら、みんなでお母さんを助けて、ターポッチョ山北の洞窟に避難するように。いいね。お父さんもすぐ後を追って行くから」

わたしたち家族は、父を庭先まで送った。

「おとうさん、早くかえって来てよ」

わたしや勇一が手を振ってというと、

「ああ、早く戻るからね」

と、父はいつものように笑顔で応えた。

しかしその日、父は帰ってこなかった。初めてのことなので、母は口数も少なく表情を強張らせていた。

二日たっても、父は帰宅しなかった。

サトウキビ畑の細道を、女子どもや年寄りが、蟹の集団移動のように避難していく。もうすぐ敵が上陸するので、北の方へ逃げるのだという。そんな人たちを目の当たりにして、事態の深刻さが子どもものわたしにも伝わってきた。

その夜、母は父が昔使っていたという大きなリュックに、米、味噌などの食料、鍋釜などを詰め込んだ。子どもたちも、着替えなどを入れた

肩掛けカバンと、水筒を用意した。

三日目の朝、わたしたち家族の逃避行が始まった。母は膨れ上がったリュックを背負い、智江の手を取った。わたしは、幸子を負ぶった。勇一と康夫も、それぞれ肩掛けカバンと水筒を斜交いに掛けた。

艦砲射撃が、追いかけるように激しくなってくる。頭上を、「ヒュー、ヒュー」と不気味な音が響いたと思ったら、後方で炸裂音が轟く。そのたびに慌てて岩陰やジャングルに身を竦めた。

母親一人で、幼い子ども五人を連れての逃避行は思った以上に難渋した。

四

夕闇が漂い始めた頃、ターポッチヨ山北の洞窟に到達した。

その洞窟は、硬い岩で覆われていて、かなり広く深そうだった。驚いたことに、入口から奥の方まですでに、女や子ども、年寄りの人、人で埋まっていた。やむなく洞窟の入り口近くに立ち竦んでいると

「ここが空いているよ。こちらに来なさい」

と、年老いた夫婦が声をかけてくれた。わたしたちは、その老夫婦が空けてくれた、わずかばかりの隙間に寄り添うようにして座り込んだ。

「ここなら爆弾が落ちてきても、もう大丈夫よ。お家の防空壕よりずっと頼りになるわね」

母は、わたしから幸子をおろしながら、子どもたちを元気づけるようにいった。

一夜明けると、ここターポッチヨ山にも艦砲弾が叩き込まれるように

なった。近くに着弾するたびに、足元が揺らぐ。

至近距離で砲弾が炸裂した。洞窟の中が大きく揺れた。

「伏せろ！」

だれかが、大声で叫んだ。

たまたま、立っていたわたしは、横倒しになってしまった。

「どこも怪我してない？」

母が私を掻き抱いた。天井から砂交じりの小石がパラパラ落ちてきた。

翌朝、数名の兵隊が顔を引きつらせて壕に入ってきた。

「アメリカが、チャランカノアの海岸に上陸してきた！」

「民間人は、もつと北へ避難しろ。もうすぐ、ここにも敵がやってくるぞ！」

と、大声で呼び掛けるまもなく、多数の兵隊が雪崩れ込んできた。

「上陸した敵が、追っつけこのターポッチヨ山にも総攻撃をかけてくる。民間人は即、北部へ避難せよ。これは軍の命令である」

父と落ち合う約束の場所を立ち去ることに、母は躊躇したが、そこには留まることを許さない空気があった。

わたしたち家族は、再び避難民の流れとなつて、北に向かった。

サトウキビ畑を通ると、焼け焦げた匂いが漂っている。累々たる屍。頭や手足の吹っ飛んだ人。腸が飛び出た人。子どもを背負ったまま突つ伏している母親。杖を持って横倒しになっている老人。日本の兵隊も多数いた。なかには、腐乱して人形をとどめ^{ひとがた}ないものもあつた。わたしは思はず目を背けた。

そんな死体を踏み越えて逃げていった。

やっと探し当てた豪も、避難民や兵隊が一杯で入れてもらえなかつた。

仕方なく、母子六人、ジャングルに身を潜めて一夜を過ごした。

避難途中で、一番困ったのは飲み水だ。サイパンでは、平時でもしばしば水不足をきたす。六月の今は乾季のため、雨がほとんど降らない。子どもたちの水筒は飲み尽くされ、母の水筒から小さなヤカンに分け移して、回し飲みした。

一口飲んで、次に回さなければならぬのだが、康夫はヤカンを手放そうとしない。すると母が奪うようにして取り上げる。康夫の恨めしそうな目から、みるみる涙が溢れ出した。

五

わたしたちは、とある自然豪にたどり着いた。しかし、やっと見つけ

たその豪で、今度は思いもしない「敵」に直面することになった。

洞窟の中を見回すと、幼い子を連れた家族や老人だけでなく、兵隊も入っていた。

避難民にまぎれて、頭に包帯をした負傷兵や足にギブスをした兵隊が、数名横たわっている。

「オギャー、オギャー」

突然、赤ん坊の泣き声が洞窟の壁にこだました。

間髪を入れず、負傷兵の一人が叫んだ。

「ウルサイ！敵の目標になる。子どもを泣かすな！」

わたしは初めて兵隊さんを怖いと思った。

上官らしき兵隊が、血走った眼で怒鳴った。

「泣き止まないなら処分しろ！敵にこの場所が知れてしまう」

母親は、赤ん坊を覆い隠すようにして身をこごめた。

別の兵隊が

「親ができないのなら、自分たちが殺つてやる」と、銃剣を突きつけて、がなり立てた。

その声に驚いて、今度は幸子が泣き出した。

兵隊の刺すような視線が、こちらに注がれる。母は、あわてて幸子の口を押さえた。それでも幸子はもがいて泣き止まない。

母は、目元でわたしたちを促すと、先に立って豪を出た。

それから、兵隊のいそうな大きな洞窟は避けた。岩陰を転々としながら、やっと小さな洞窟を見つけて入ることができた。

最初の頃は、家から持ってきた食料でなんとか食いつないでいた。やがてそれらも底をついてきた。

もつとも、鍋釜はあつても、もう煮炊きはできない状況になっていた。敵の飛行機が洞窟の上空を飛ぶことを恐れたのだ。煙が上がれば爆撃の標的になること必定だった。一握りの生米を口に入れ、小刀で刻んだ鰹節をおかず代わりにした。

洞窟に月の光が射し始めるのを待って、母は水や食料を求め出掛けるようになった。その間、わたし自身、心細い思いを抱きながら、幼い弟妹の世話をしなければならなかった。こんなとき、父がいてくれたらと、どんなに思ったことだろう。

母は、どこで探してきたか、サトウキビやバンジローなどを持って戻ってきた。わたしたちは奪い合うようにして齧り付いた。

時には、口に何も入らない日もあった。そんな夜は、空気が抜けた風船のようになって寝た。また、飢えと渴きのため、目がさえて眠れず、

そのまま朝を迎えることもあった。

幸子は、特にかわいそうだった。まだ乳離れしてないので、生ものや、固いものを飲み込むことができず、かといって母の乳が出にくくなっていた。重い荷を背負つての弾雨の中の逃避行と、自分の食べるものは最小限にして、その分子どもたちにやっているのだから無理もなかった。

泣き出しそうになると、乳を含ませる。出ない乳を飲もうと懸命な幸子を、母は哀しそうな目で見つめていた。

そんな中、おとなしくしていると思っていた康夫が、突然嘔吐しだした。ナメクジやトカゲのようなものが、消化不良の形で混ざっている。吐くものが尽きたかと思つたら

「オミズ……カアチャン、オミズチョウダイ ……」

康夫が、力無く叫んだ。

もうどの水筒にも水は残っていないなかった。昼間にもかかわらず、母は、水を汲んでくるといって、空の水筒をかき集めた。

「カアチャン……カアチャン」

一旦立ち上がった母だが、その声に身動きが取れなくなってしまった。

「おかあさん、ウチがくんでくる！」

わたしはとっさに、母の手から水筒を奪い取っていた。

「お前ひとりでかい」

「なーに、だいじょうぶよ」

「そうかい……でも気を付けていくんだよ。危ないと思ったら、すぐ引き返しておいで」

母はそういうと、水場までの道筋を繰り返し繰り返し教えてくれた。

その時、幸子がヨロヨロと拙い足取りで追いかけて来た。

「ネーネー、ネーネー」

私はあわてて幸子を抱き上げると、そのクリクリした目を見据えて

「すぐ戻るからね。サチコのオミズもいっぱいいくんでくるから、イイコしてまっているのよ」

といい含めると、母に抱き渡した。

幸子は泳ぐように身を乗り出し、眼差だけでもついて来ようとする。

そんな幸子を背中に置いて、わたしは洞窟を後にした。

どうにか探し当てた水場にも、腐乱しかけた死体が横たわっている。水筒の口を水に沈めると、ウジ虫が一緒に流れ込む。蠢くウジをおっかな取り除けて、なんとかかすべての水筒を満たすことが出来た。

水の重みを両肩に感じながら、立ち上がったときだった。これまで耳にしたことのない早口の会話が飛び込んできた。とっさに、アメリカ力兵

だと思った。わたしは無我夢中でジャングルの中を走っていた。

やっと落ち着きを取り戻し、元の洞窟に戻ろうとしたが、歩いても歩いてもたどり着けない。

水を欲しがる康夫に、心配している母の顔が二重写しになる。早く水を持って帰らなければという焦りと、一人ぼっちになった心細さが、ない交ぜになって襲って来た。

家族の待つ洞窟への方向感覚を全く失ってしまったわたしは、あの耳にしたことのない早口の会話に脅え、時折頭上を行く敵機の轟音に怯みながら、ジャングルをさ迷っていた。

一晚を岩の窪みで過ごしたわたしは、「万一はぐれた場合は、北へ向かえ」という母の言葉を思い出した。とにかく北へ行けば、家族に会えるという漠とした期待を抱いて……

そのうち、避難してゆく人たちの後についていくことを覚えた。当然のごとく、それらの人々の中に、母や弟妹の姿を追い求めてみたが見つめることはできなかつた。それどころか、親とはぐれたか、親を亡くしたかの、子どもだけの避難民も少なくなかつた。

先に行く難民の流れが、巨大な円筒形の窪地へ吸い込まれていく。そのあとについて地の底に降り着くと、自然の横穴があり、ここにも多くの人たちが身を寄せ合っていた。

夜になると、戦場にいることが信じられないくらいの静けさが洞窟の中を支配した。その暗闇の中で、子連れの家族が声を潜めて話し合っている。

「これはお父さんの会社の同僚からもらったお薬だよ。これを飲めば一緒に死ねるからね。捕虜になったらそれこそ恥だから、これを飲んで、日

本人らしく、自決しようね。死ぬときはみんな一緒だからね」

この家族のそばにすることがこわくなったわたしは、豪の入り口へ場所を移した。

そのわたしを、学校で何度も復唱させられた「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪過の汚名を残すこと勿れ」という「戦陣訓」の一節が執拗に追いかけてきた。

六

夜が明けるのを待って、わたしは逃げるように洞窟をあとにした。

ジャングルを当てもなく歩いていると、突然、緑と緑の谷間に、屏風を立てたような巨大な岩山が現れた。何かに魅入られたようにその岩山

に引き寄せられていく。

山の麓に辿り着いてみると、目くるめくような岩の壁が屹立している。脇の細道を回り込んだとき、急に視界が開けた。それはサイパン島の最北端、マツピ岬だった。

緑の絨毯を敷き詰めたような平坦部から、垂直に落ち込んだ崖の下は、目の覚めるような蒼い海だ。銀白色の波が、ゆっくりと寄せては岩に砕け散っている。

岬の先は、茫漠とした太洋が果てしなく広がっているだけだ。子ども心にも、もう後がないような緊張感が走った。

山の中腹の自然の洞窟に潜り込むと、ここでも真っ先に母や弟妹らを探してみたが、徒労に終わった。

この壕では、やたらと日本兵の姿が目についた。民間人にまぎれて逃

げてきたのだろうか。片腕を失って包帯をした兵、横たわったまま額のウジを払いきれないでうめき声を上げている兵隊もいる。

二、三日すると、この豪も敵の攻撃にさらされるようになった。砲弾が雨あられの如く降り注ぐ。日本の敗残部隊への、米軍による掃討作戦に、この豪まで巻き込まれ始めたのだと兵隊たちが話している。

夕方だった。砲撃が止んだと思うと、豪の外がにわか騒がしくなってきた。それはまぎれもない、あの水場で耳にした会話だった。アメリカ兵がここまで登ってきたのだ。何をしゃべっているのか分らないが、「ここに隠れているよ」と言い合っているようだ。

ほどなく、スピーカーから、鼻にかかるような日本語で呼びかけてきた

「ニホンノヘイタイノミナサン、イクサハオワリマシタ。ムダナテイコウ

ハヤメテ、テヲアゲテ、デテキナサイ」

「ミンカンジンノミナサンモ、コロサナイカラデテキナサイ。ミズモタベモノモ、タクサンアリマスヨ」

だが、応じる人はいない。

突然、銃を持った日本兵の影が入り口付近で動いた。

「パン！、パパン！」

乾いた軽い感じの銃声が、一、二、三発打ち込まれた。仰のけ反ぞるようにして日本兵が倒れた。

間髪を入れず、別の日本兵が、手榴弾を外に投げ爆破させた。それに応えるかのように敵側から一斉に撃ち返してきた。

再び、静寂が訪れた。今度は豪の入り口近くから呼びかけてきた。

「デテコイ。ムダナテイコウハヤメテデテキナサイ。ミズモアリマス。タ

ベモノモアリマス。ハヤクデテキナサイ」

豪の中は、物音ひとつしない。

「ハヤクデテキナサイ。アトジップンマチマス。ソレデモデテコナイト、バクダンナゲコミマスヨ」

「米軍に捕まったら、耳や鼻をそぎ落とされ、女の人は辱めを受ける」と教えられたことが頭を過った。

そのとき、信じられない光景がくりひろげられた。

日本兵が、三人の女の子を連れた母親にしきりに話しかけている。母親の驚き戸惑う表情に、兵隊が顔をしかめながら、言い含めている。

やがて母親は観念したように、年長の女の子に耳打ちした。女の子は、かすかにうなずくと、たった一人で豪の外に出て行ってしまった。わたしは何ごとが起こったのか理解出来なかった。

しばらくすると、再び女の子が壕の入り口に姿を現した。両方の掌に色とりどりのキャンディーを持っている。

「どうだった？」

母親が覗き込むようにして聞いた。

「外には大ぜいのアメリカのヘイタイがいるよ。ジープやトラックもたくさんあるよ。ころさないから出てきなさいって」というと、キャンディーを口にしようとした。

「食べるんじゃないよ！」

母親は、しばらく考え込んでいた。が、思い決したように

「よし、どうせ死ぬなら明るところでみんな一緒に死のうね」

そういうと、女の子を先頭に豪の入口へ向かった。すると、ほかの避難民もぞろぞろと豪を出始めた。兵隊も混じっている。

外は、澄んだ空気が流れていた。わたしは思わず大きく深呼吸した。

初めて目の当たりにしたアメリカ兵は、体が大きく、色は白いものから黒いものまでいた。眼の色が青いのを見て、あれが「ヒージャーミー（山羊の目）」かと妙に納得した。

米兵が、足を負傷している子どもに、「負ぶってあげよう」とジェスチャーまじりに手を差し延べる。その子が応じようとすると、祖父らしき老人が怖い顔で制止した。

別の米兵が、五歳くらいの男の子に大きな水筒を差し出す。

「飲むんじゃないよ」

子どもは恨めしそうに母親を睨みつけた。米兵は、肩をそびやかして苦笑いした。

（戦車はいつ来るのだろうか）

わたしは、あたりを見回しながら思った。

「捕虜になれば戦車に轢かれて殺される」と、何度も聞かされていたからだ。

やがて箱車の付いたジープがやってきた。

(戦車のある所まで運ばれるのかな)

わたしたちは、身を寄せ合って怯えていた。

七

トラックに揺られながら、視界に入ってくる風景は、いたるところ黒焦げの荒野と化していた。ここかしこに砲弾の落ちた跡が大きな窪地を作っている。

あんなに賑やかだったガラパンの街も、破壊され尽くし、さながらゴーストタウンだ。ねじ曲がったトタン板が、一面を波のように埋めつくしている。鉄筋コンクリートの建物は、黒く焦げ落ち、骨組だけが墓標のように残っている。

そんな荒廃の中に、一つの銅像が、砲撃に耐えて立っていた。確か遠足で来た覚えがある。南洋興発の社長で、「砂糖王」といわれた人のブロンズ像だ。見上げるような高い台座の上で、左手をズボンのポケットに入れ、胸を張って正面を見据えている。あの激しい戦闘にも、ほとんど無傷で毅然と立ち続けている。

ススペ湖の近くを通り過ぎると、製糖工場の煙突が、目に飛び込んできた。製糖期には、四六時中煙の絶えなかつた四本の煙突のうちの二本が、今は存在の意味もなくただ置き残されている。それにしても、あの広大

な工場の建物群はいったいどこへ消えてしまったのだろうか。

その製糖工場跡地を囲い込むように、有刺鉄線が張りめぐらされている。ここがススぺ難民収容所だった。

滑走路跡を挟んで、海側に米軍の基地が広がり、その片隅に、規模は小さいが、軍夫として連れてこられた朝鮮人の収容所があった。また、日本兵は、チャランカノアの捕虜収容所に拘束されているという話だった。

わたしたちが入れられたススぺ難民収容所は、バラック造りの建物ごとに「団体」というグループに分けられていた。建物の中も外も、戦火を生き延びた人々で雑然としている。

驚いたことは、難民の半数が子どもであり、戦禍で親を亡くした孤児であった。また、同じ孤児でも、六歳未満の孤児は、収容所内にある「孤

「児院」に入れられているという話を耳にした。

わたしの属する「団体」の裏側は、この収容所の墓地になっていた。

収容所では病気や栄養失調で死ぬ者が多かったから、毎日、病院から五、六人ずつ担架で運ばれてきて埋められた。

時には、シヨベルカーで瞬く間に大きな穴を掘ると、ダンプトラックが、その日亡くなった遺体を運んでくる。数えきれないほどの死体が、トラックから滑り落ちてくる。その上に、シヨベルカーで土を埋め戻して、埋葬は終わる。

こんな有様を、否が応でも毎日見せられて、中には「アキサミヨーあの激しい砲火を逃れ、せつかく生き延びてきたのに、こんな所で死ぬなんて」「あの時、一思いに死んだほうがよかったんじゃないかな。こんなつらい思いして死ぬくらいなら」などと、涙声でいう人もいた。

島の最北端、マッピ岬の「万歳クリフ」や、わたしがとらわれたマッピ山の「スーサイドクリフ」の惨劇を知ったのも、この收容所でのことだ。マッピ岬では、ある人は躊躇しながら、また、ある母親は子どもを抱きしめながら、岬の崖の上から海に飛び込んだのだ。自決者の多くは「天皇陛下万歳！」の声をあげながら飛び降りた。あまりに多くの人が飛び込んだ結果、海は血で真っ赤に染まり、海面には死体が積み重なって浮いていたという。

「自分たちもあそこまで逃げていけば、同じ運命をたどったかもしれない」と、ボソボソ語り合う声が、今でも私の耳の底に沈殿している。

一方で「今は、こんな有刺鉄線の中だが、やがて日本軍が助けに来てくれる。最後は日本が勝つに決まっている」と、あくまで日本の勝利を信じている人もいた。

八

收容所の広場の中ほどにパンの巨木があつて、その木陰は子どもたちの恰好の遊び場になつていた。收容されてから何日目だっただろうか。その木の陰で、漫然とフェンス向こうに広がる海を眺めていた。

「ねえちゃん！ ハツコねえちゃん！」

聞き覚えのある声に、反射的に振り向くと、目の前に勇一が立っている。傍に智江もいる。二人とも骨と皮だけに痩せて、眼だけが大きく笑っている。その後ろで、ガラパンの大叔母と良子ねえさんが、目を丸くしてわたしを見ていた。

大叔母に引き取られたあと、勇一から、母と康夫の悲しい最期を聞かされた。しかし、どうしても現実のことと受け止めきれないわたしは、

一滴の涙も出なかつた。

母の死後、取り残された子どもたちは、遺体に縋り付くうように蹲っていたが、幸子の泣き声で米兵に見つかり、壕から連れ出されたという。

この収容所にくるまで三人はずっと一緒だったが、程なく、幼い幸子は米兵にどこかへ連れていかれてしまった。その後で、大叔母たちと遭遇した。幸子が連れていかれたと聞いて、大叔母は孤児院や病院など心当たりを何度も探してくれたが、いまだに消息はつかめていないという。

大叔母の夫は、運転手ということで、真っ先に徴用され、弾薬輸送中に爆撃を受け亡くなっていた。実業学校の学生だった良子ねえさんも、従軍看護婦として学徒動員され、行く方が知れなかったが、この収容所で再会できたということだった。

収容所の建物は、大勢の人でごった返している上、夜はトタン屋根か

らの放射熱でムンムンしていた。ある晩、あまりに暑苦しく眠れそうもないので、勇一と智江を誘い、建物の前の広場に出てみた。

軟らかい草の上に、三人膝を抱えて座り、空を仰ぐと、手を伸ばせば掴めそうな満天の星。その星々を辿って、南の方角に四つの明るい星を探し当てた、

「あれが南十字星だよ」

と、勇一と智江に教えていると、ふっと父の顔が思い浮かんだ。

「早く帰ってくるよ」という言葉を残して、いつものように笑顔で出かけていった父。あれ以来、その行方は杳として知れない。今もジャングルや岩場に隠れ潜んでいるのか。それとも、チャランカノアの捕虜収容所に捕らわれているのだろうか。「捕虜になった軍人軍属は、ハワイに送られている」という話を聞いていたので、もしかしたらハワイで生きてい

るかもしれないと微かな希望を抱いたりした。

収容所での生活にどうか慣れ始めたころ、サイパンやテニアンの飛行場から、巨体を持って余しているような米軍機が、連日出撃していく。それに伴い、男の人たちは、軍作業にひんぱんにかり出されるようになった。聞くところによると、沖繩や日本本土を空襲する飛行機に、爆弾を積み込む仕事をしているようだった。

これは、戦後知ったことだが、広島や長崎に原子爆弾を投下したB-29は、テニアンが発進基地だったという。

九

四季の変化に乏しいこの南の島でも、歳月は立ち止まることを知らない。

有刺鉄線の中での生活は、二年目を迎えた。米兵に連れていかれた幸子の行方は、依然として掴めないままだ。

役員らしき人が、沖繩出身者の名簿をつくって回り始めた。いよいよ「引き上げ」が始まったのだ。夫を亡くした大叔母は、沖繩に帰れることに安堵していたが、母と康夫を失い、父と幸子の消息も分からないなかで、サイパンを離れることは、わたしを不安にした。

引揚の話が出ると同時に、孤児院に収容されている大勢の孤児たちも、沖繩に帰そうという話が持ち上がり、そのためにカンパを募り始めた。

わたしは、焦^{あせ}った。幸子の行方も分からないまま、島を離れる日がそう遠くないことに焦^{あせ}りを感じていた。

沖繩へ発つという前の日、大叔母が、わたしを近くの海岸へ誘った。波打際を歩きながら、大叔母はサンゴの菊目石を一個手に取ると、愛お

しそうに端切れにくるんだ。

わたしは、まだ身内の死を受け入れることはできなかったが、こぶし大の菊目石二個と、それより小さめの一個とを拾った。大叔母がそつとわたしの肩に手を置いた。わたしはもう一つ、親指ほどの菊目石を拾い上げた。

沖繩への引き上げはLST（戦車揚陸艦）三隻で一つの船団を組んでいた。大叔母と良子ねえさん、それにわたしたち兄弟三人は、ガラパンの北にあるタナパグの港で、LSTに乗せられた。

水平線が今まさに、巨大な太陽を呑み込もうとしていた。夕日に縁取りされたサイパンの島が、みるみる遠ざかっていく。わたしは、その島影に向かって呼びかけた。

「おとうさん、おかあさん、サヨナラ。康夫も幸子もサヨナラ……」

何度も何度も胸の中で叫んだ。

母や康夫の眠るサイパンを後にして、とりわけ生死の定かでない父や幸子を残したまま島を離れる後ろめたさを、目の前の白い航跡のように引きずりながら、サイパンはしだいに遠く小さくなっていく。生きている、いつか会えるという望みも、波の彼方の島影のように、次第に霞んでゆく。

このとき初めて、涙が止めどもなくわたしの頬を伝って流れて落ちた。船の旅は、わたしたち兄弟にとって初体験だった。乗船してから二日程は船酔いに悩まされ、断続的に嘔吐を繰り返した。

船の中では、大人たちが、相変わらず「日本は本当は勝ったのだ」「いや、沖縄は玉砕したというじゃないか。負けたんだよ」「我々は、捕虜交換のため連れていかれるんだ」など、いろんな憶測を飛び交わしていた。

長い収容所生活の間には、結婚する若いカップルが出てくる。わたし

たちの乗ったLSTにも妊婦が何名かいて、その中の一人が産気づいた。医者はいなかったが、看護婦がいて、その出産のとき立ち会った。

母親に抱かれ、安らかに眠るあかこ嬰兒を見ていると、生まれたばかりの幸子の面影が鮮やかに蘇ってきて、胸が張り裂ける思いだった。

そのうち、船内が段々冷えてきた。常夏の島に生まれ育ったわたしたち兄弟にとって、この寒さは初体験だった。これが教科書に出てきた「冬」というものかと、そのときはじめて肌で感じた。

サイパンを発つて五日目、沖縄中部の東海岸、くばさき久場崎というところに到着した。

着いたときはもう夜で、暗闇の中に煌々としている灯りを見た大人たちは「ウリヒャー、日本は勝っているじゃないか」と、勝手に喜んでいた。

東の空が明け染める頃、騒がしさに目が覚めて甲板に出てみると、息がかすかに白濁している。思わず身震いしてしまった。

けたたましい音を立てて、みるみるボートが接近してくる。船尾に星条旗を掲げている。よく見ると、棧橋にもアメリカの国旗が翻っているではないか。岸壁に迎える人も、まぎれもなくアメリカ兵だ。わたしは、初めて日本が負けたことを確信した。

LSTから降り立つと、大人も子どもも頭から白い粉を掛けられた。さらに洋服の上着とズボンを開けられて、容赦なく吹き込んでくる。

DDTの散布が終わると、今度は、沖縄人の係が、「ここは、久場崎のキャンプヤーの組。向こうは、インヌミヤーに行く人たちだよ」といって、選り分けていく。

「インヌミヤー」のグループに入ったわたしたちは、大きな軍用トラック

に乗るよういわれた。

トラックは、米軍艦の浮かぶ、静かな内海を右手に眺めながら、馬車軌道が走っていたという道を、北の方へ向かった。途中飛び込んでくる風景は、いたるところ戦争の爪痕が残っており、サイパンの荒れ果てた光景が否が応でも蘇ってくる。

（ああ、これが父母の生まれ育った沖縄なのか）と思うと、両親から聞いて思い描いていた「平和で、のどかな島沖縄」のイメージとは、どうしても重ならない。

やがてトラックは、左に大きく旋回すると、見上げるような急勾配を、エンジンをフル回転して上りだした。年配の夫婦が、懐かしそうに、「ユンタンピラ（読谷坂）だ！」と叫んだ。

坂の途中、左の窪地一帯を見下ろすと、米軍が引き上げた跡だろう、

幕舎やコンセントが雑然と放置されていた。

坂を上り詰めたところに、「インヌミ收容所」があった。大勢の引揚者でごったがえす風景に、ここでも、ススへの收容所に舞い戻ったかのような錯覚を覚えた。

インヌミで二晩泊まった後、母方の実家のある美里村石川行きの特ラックに乗せられた。

こうして、私たちは沖縄での新たな生活をスタートさせた。

それにしても、沖縄戦をからくも生き残った人たちから、その実体験を聞かされたたびに、あのサイパンの惨劇が、ここ沖縄でも「鉄の暴風」として繰り返されたのだと、悵然たる思いに駆られたのだった。

十

浦添市に住む娘の桂子は、職業婦人ではあるが、子育ても一段落し、週末にはわたしの様子見がてら、泊まりがけで遊びに来る。

「桂ちゃん、世の中にはよく似た人がいるもんだね。昨日、スーパーでレジ待ちをしていたら、中年の男性から『もしかして、コザ中学校で先生をしていませんか？』と、声をかけられたのよ」

流し台に向かい、夕飯の支度をしていた桂子は、顔だけわたしに向けて応じた。

「お母さん、確か、前にもそんなこといったよね」

「そうそう、これで三度目よ。あれは、二十年以上も前のことだったと思うけど、市民 会館のロビーで友達を待っていたら、初めて会う人に、『妹

さんは、先生をしていますか』と聞かれたことがあったの。

それから何年かして、一番街を歩いていると、二人の女性から、『先生、具志川中で国語を教えていましたよね』と話しかけられ、ビックリしたことがあったわ。その時は、他人の空似と軽く受け止めたただけだったけど……」

桂子は、エプロンで手を拭きながら振り返ると、わたしの顔を覗き込むようにして、いたずらっぽく笑った。

「お母さん、ひよっとして、その先生していたという人、お母さんの妹じゃなくって？ ほら、サイパンで亡くなった幸子という……」

死んだと思っていたけど、本当は生きていて、だれかに沖縄に連れてこられて、先生になっていたりして……」

それまでわたしの胸の奥深く、ずっと心掛かりしていたものが、輪郭

を持って浮かび上がってきた。

心臓が早鐘のように打ち始めた。

(ひよつとしたら、幸子は……)

避難していた洞窟から、水汲みに出て行こうとするわたしを、拙い足取りで追いかけてきた幸子。母に抱き留められ、恨めしそうに見つめていた幸子の、あの深眼差。今でもこの脳裏にはつきりと焼きついている。

あれから七十一年もの間、わたしは幸子を亡き者と自分にいい聞かせてきたのだった。サイパンから大切に持ってきたサンゴの菊目石は今、先祖代々の墓に祀られている。

(でも……ひよつとしたら、幸子は死んでいなかったかもしれない。生きていて、孤児として沖繩に連れてこられて、心ある人に育てられ……)

一歳にして肉親から引き離され、兄弟はおろか、実の両親の顔さえ覚

えていない、そんな幸子が、教え子に慕われ尊敬されるような立派な教師になつていたとしたら……

そうだ、幸子は生きていてもかもしれない。生きているなら、是非会つて思い切り「幸子！」と呼びたい)

「お母さん、どうしたの？急に黙りこくつて……」

(幸子！あなたを七十一年もの間、死んだことにしていたこの姉を許してくださいね。今はもう勇一も他界し、智江とわたしだけになりました。)

あなたは戦後、幸子とは別の人として生きて来たかもしれない。でも一目あなたを見れば、わたしには、あなたがわたしの妹幸子であることを確信できるはずですよ。

幸子！あなたに会って、お父さんやお母さん、弟妹の分まで、この手で抱きしめてあげたい！)

吸い込まれそうなサイパンの蒼い空

蝶の群れ飛ぶプルメリア

サトウキビ畑のうねりに見え隠れしている

水タンクのあるトタン屋根

その屋根の下

ささやかではあるが

倅せに暮らしている小さな家族

それは、もう遙か遠い夢のようであり

つい昨日のことのようでもある

わたしは、思わず声をあげた。

「桂ちゃん、あなた、近いうち休み取ってわたしに付き合ってくれない？」

(完)